



佐沼高等学校在仙同窓会便り

ひろがり

No15

左：新緑の母校写真
撮影（20回生 高橋）

発行日：2016. 7. 21
発行者：佐高在仙同窓会広報誌委員会

「同窓会の充実を実感！」

佐沼高校在仙同窓会会長 高橋孝昌



盛夏の候、会員の皆様にはご健勝でお過ごしのこととお慶び申し上げます。

また、平素から当同窓会に対し、温かいご理解とご支援を賜っておりまして誠に敬意と感謝を申し上げます。

さて、東日本大震災後五年余を経過し、被災者の方々の受け止め方は「もう五年」あるいは「まだ五年」と感慨に相違があるところですが、総じて復興への明るい兆しが五年の月日を経て身近に感じられるようになりました。

勿論、震災復興については、行政をはじめ関係団体等が懸命に尽力しておりますが、被災者の心が早期に癒され、笑顔を取り戻せる施策を継続実践されることを期待しているところです。

なお、時恰も熊本地震で多くの方々被災に遭われていることに心よりお見舞いを申し上げ、併せて、私達が大震災発災時に体験した苦悩に思いを馳せながら、一日も早い復旧・復興を祈念して止まないところであります。

ところで、当同窓会の現状を観るに、大震災を契機に会員の絆が強まっており、その証しとして、会員の親睦と同窓

の絆再構築に資する「総会」への参加者が年々増加し、会員同士の親睦と絆が強く結ばれていることを目の当たりにしているところであり、今や、当同窓会が名実共に充実してきていることを実感しているところであります。

とはいえ、会の更なる充実・発展を期するためには、会運営各般に亘る諸施策の実践等に会員皆様のご理解とご支援が必要不可欠でありますので、今後とも同窓会総会参加等を通じて、会運営により一層のご協力をお願い申し上げます。

結びに、会員の皆様の益々のご健勝・ご多幸をご祈念申し上げます。

「地域をフィールドに」

佐沼高校校長 小野寺清隆



在仙同窓会の皆様には、日頃より本校の教育活動に様々な形でご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

御礼申し上げます。

今年度百十四年目を迎える在校生は、諸先輩方の築いた文武両道を見事に継承しております。「武」では県総体において、ボート部が女子ダブルスカルで優勝しインターハイ出場を決めたのはじめ、女子学校対抗優勝、男子六名・女

子九名が東北大会に出場します。さらに、陸上女子走り幅跳びで優勝、卓球女子シングルス、水泳男子三名・女子一名が上位入賞し東北大会に出場します。また、文化部でも美術部が二年連続で全国総合文化祭への出場を決めています。「文」では、この三月の卒業生は、東北大学一名を含む国公立四十六名、公務員十四名合格という実績を残しました。

五月二日の開校記念講話には、高八回生で元海上保安庁警備救難監の坂正直氏をお招きし「日本の発展と海」と題した、世界に視野が広がるグローバルなご講演をいただきました。

さて、今年の佐高は例年以上に地域社会に積極的に出て行く活動を行います。一年生の総合的な学習で、登米市職員から各産業の現状と課題を説明された後、直接聞き取り調査を実施し、解決の一方策を提案する活動を行います。また、地域行事やボランティア活動に個人はもちろん、生徒会や部活動単位で積極的に関わります。

今年度もこれらの活動を通してリーダーシップを発揮し、社会に貢献できる骨太の人物を育成するため、教職員一丸となつて取り組んで参りますので、今後ともご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

新副会長登場

「同窓の御縁に感謝」

副会長(高十八回生) 羽生正弘



大先輩佐藤裕也先生が後輩に託すというお言葉から、母校ではたいした勉強もスポーツもせずノンポリだった私に、突然副会長のお鉢が回ってきてしまいました。

大学紛争期を経て列島改造論に沸き立つに社会に放り出され、以来紆余曲折人生、変わらないのは郷里の母と有り難いことに母校同級生の絆。男女併学で魅力的な同級女子が多いせいか、まー良く集まり、いつしか在仙同窓会にも足を踏み入れることになりました。

この間、仕事を通じてありがたいことに丸森会長(当時七十七銀行頭取)からお声をかけて頂き、同窓会では現高橋会長始め諸先輩方から叱咤激励を頂き、大先輩方の大きな手のひらの上で自由と同窓会活動に携わらせていただいたことは感謝に堪えない次第であります。

生来の猪年、怖いもの知らずに鮫名氏

(十九回生) 諸氏らと語らい、平成十八年十二月に同窓のスポーツ親交のためゴルフ愛好会を丸森会長に愛好会会長をお引き受け願ひ発足、多くの諸先輩と後輩諸君との交流を得ました。

3・11東日本大震災、多くの同窓皆様の未曾有の被災に際し、二十回生高橋氏二十二回生菊池氏、田村氏らと「今こそ同窓の絆が必要、同窓会活動を広報しよう」と在仙同窓会機関紙「ひろがり」の発刊に踏み切りました。

こうした同窓会活動を通じ母校出身で何と社会で活躍されている同窓生が多くいることかと改めて実感しました。未来に向けて、その時代その時代を、志をもって社会で活躍しようとする後輩諸君が母校から、これからさらに多く輩出されてくるものと思います。

先輩諸兄が築きあげてきた伝統ある在仙同窓会は県北の雄、佐沼高校にお世話になった縁の絆として、多くの同窓生の親交の場、後輩への後援、情報交流の場として永遠に引き継がれていかなければなりません。総会終演での校歌、応援歌斉唱は永遠に母校の絆の象徴であります。そう考えると副会長の任務の重大さを感じ、不安の極みであります。会員皆様のご支援とご指導を得て役割を果たしたいと考えています。

特別寄稿

故郷わが町の伝統文化

「登米秋祭り異聞」

心の絆で山車を曳けを鑑賞して

高十八回生 羽生正弘

ザウツブルグ祝祭劇場を模して一九九四年に開館した登米祝祭劇場を運営する公益財団法人事務局長の山田悦且氏が刊行され、本機関紙でも渡辺祥子さんが紹介した『ひんがしに良き国ありて―釈迦空からの贈り物―』に出ている母校校歌の最初の一節、「良き国」とはもちろん、東日本の一角にとっても暮らしやすい理想郷として現登米地方を称えたもの。

山、川、水、田畑の豊かな自然に育まれ、そこには地域に代々伝わる祭りや伝統文化が承継されていた。

第十八回夢フェスタ水の里『心の絆で山車を曳け』が今年三月五、六日に登米祝祭劇場で上演された。故郷の伝統文化を発掘し、毎年登米市の各町が持回りで、それこそ企画、出演、裏方まで住民参加で舞台公演を続けている。

登米市の関係皆様のご努力で、時を越えて古今を繋ぐ町の絆とそこに住む人の心を熱くする事業となつていくことに、頭が下がる思いで鑑賞させていただ

いた。

高校友人が登米謡曲会主力として特別出演、朗々と吟じ、踊り手の中心には私の親戚がいた。劇団四季を彷彿させる地元キャストの熱演、大掛かりな舞台作り、大小の道具、衣装など町を挙げて力を合わせ上演されていることに万感の敬意を表し、充分過ぎるほど豪華な秋祭りの醍醐味を堪能した。

今回の題材地は「豊里町」とのこと。平成二十九年三月四、五日に上演が予定されている。豊里町出身の方はもちろん、この創作劇公演をまだご覧になつていない同窓の皆様には、輝くわが町に伝わる伝統文化として、ご鑑賞を是非お勧め申し上げたい。但し、事前に前売り券を入手しないと当日券はまったくありません。それほど地元では関心の高い公演ですのでご注意ください。

(写真 今年開催のポスター)



各界で活躍する

在仙同窓生

英語の授業の思い出

高十九回生 佐藤 義明

(元宮城大学教授)



長い間英語教師をしていたので、その原点とも言うべき私の受けた英語の授業について、思い出を記してみたい。

英語との最初の出会いは、中学に入ってから(昭和三十六年)。英語を好きになったのは、一年の時のI先生のおかげかも知れない。授業中、ジョークや紙飛行機を飛ばし生徒にあてる。教科書は『ジャック・アンド・ベティ』。『アイ・マイ・ミー、ユー・ユア・ユー』と大声で暗記させられた。また、課外の英語は専門が国語のY先生。先生の「前置詞の目的語」という言葉は、なぜか今でも覚えている。授業の他に、ラジオ講座「基礎英語」を聞いていた。

佐沼高校では三人の先生に教わる。三年の「リーダー」はS先生で、授業の進度がとにかく速く、しんどかった。大学受験を意識した授業。「文法」は三年間H先生。この授業で教科書にはない「ネクサス」という用語を知った(大学でまたこの文法用語に出会い、少し優越感を覚える)。二年のころ海外文通を始め、筆記体を読むのに苦労した。この時、T先生に助けていただいた。

大学は英文科に進学。初めてアメリカ人の先生の授業を受けた。単語が少し聞き取れる程度。英会話などの授業もあったが、多くは文学や語学関係。四年の時、S先生の演習でシェイクスピアの四大悲劇を読む。原文は歯が立たなかったが、翻訳を併用しながら登場人物の心理などを分析した。

卒業後は、大学院に進み英文学を学ぶ。修士論文はロマン派の詩人に決め、指導をM先生にお願いした。個人指導は、先生の前で文献を読んで訳すというきわめて単純な方法。しかし、これは私にとっていい勉強になった。以後、これまでの「感覚」的な読みから、「論理」的な読みを目指すようになる。

よい先生方に恵まれたことは、幸運だった。今後も英語との付き合いは続けていきたい。

絶滅危惧種の方言を守りたい!

高三十三回生 佐々木真奈美

(ラジオパーソナリティ、タレント、薬剤師)



薬科大在学時代から放送業界に身を置くことになって以来、三十三年が経過しました。現在は薬剤師とタレント業を兼業しています。

高校時代は音楽部・陸上部に所属し、放送部とは縁がなかった私が、ひょんなことから喋る仕事に携わることになり(この辺りは、そのうち機会があれば詳しくお話しします《笑》)、初めに直面したのが、「訛り」でした。

佐高生徒を『訛っている組』と『訛っていない組』に大別できるとしたら、私は絶対『訛っていない組!』と自負していたのに、いざ仕事として喋ってみるとかなり重症の訛りだったようです。

「君の訛りはDNAに刻まれ、血液の中に流れている。どれほど訓練しても抜けないから諦めなさい」と当時のCMディレクターに言わしめるほど!

それから血の滲むような努力をして(?) 訛りを取ったのですが、「やっと訛りが抜けた!」と思って安堵したところで、現在担当しているTBCラジオ「colors木曜日」にて「方言でござります」というコーナーをやる事になったのです。

ずっと封印してきた「訛ること」でしたが、ラジオをお聞きの皆様から、「なんだや、まなみちゃん! うまいごだ!」と、お褒めの言葉を頂き、調子に乗ります。決して「うまい」わけではなく「戻った」だけなんですけどね《笑》。

放送で私が語る方言は、すべて生まれてから高校卒業まで過ごした登米市で育まれたもので、皆様が聞いても「馴染み深い言葉」だと思えます。ただ、最近は少子化・核家族化が進み、方言も意識して残していこうとしなければ消えていく運命にありそうです。関西弁等と比べると、明らかに「絶滅危惧種の方言」と言えます。近頃は、これを守らなければ!と使命感に燃えている次第です。どうぞ皆様のお力添えを頂きますよう宜しくお願いいたします。

5月12日、ワールド警備保障(株)本社会議室をお借りし、今年の総会開催に向け、当番幹事の27回生の5人にお集まりいただき、「三同期会」を行いました。近況報告、震災丸5年、高校時代の思い出などを語り、総会への参加を呼びかけていただきました。

お久しぶりの方もいらっしやると思いますので、自己紹介と近況報告をお願いします

(五十嵐信)

中田町「宝江中」出身の五十嵐です。「宝江中」は、今は「グランド」になっているようです。高校卒業後、大学は福島大学、七十七銀行に就職、30数年、銀行員生活をしています。時々、実家に帰るといふようなところで。

(菅原誠)

菅原です。東和町「錦織中」出身です。自転車で錦桜橋を渡って、通っていました。高

校卒業して仙台で、30年程前に会社を設立して、ずうっと、という感じです。親もこちらに呼んだのですが、丁度、震災前年の3月11日に母親が亡くなりました。蒲生の方にお墓があつたのですが、流されてしまいました。淋しいですね。

(佐藤次郎)



佐藤次郎さん

佐藤です。高校卒業後は、山形大学を卒業、何を思ったか、自衛隊に入隊しました。佐高の先輩で、自衛隊で人事を担当している方がいて、すでに関東の会社で就職が決まっていたのですが、「来てみないか」と誘われ、自衛隊に入りました。以来30年余り、北海道が3分の1、東京が3分の1程の勤務ですか。3年半前に、56歳で自衛隊を辞め、今は、住友生命で、顧問として東北担当をしています。

(佐藤則夫)

佐藤です。出身は中田町、卒業後、東北学院大に入り、その後、県警に就職しました。それからずっと県警、現在は仙台北警察署に勤務しています。プラタナスについては県警内にも組織があつて、非常に面倒をみていただいていま

す。また、在仙の方でも、ずつとお世話になっていきます。仕事やいろんな面で、有利と言つてはおかしいですが、いろいろ協力をいただける場面が多く、非常に助かっています。

(千葉優子)



千葉優子さん

千葉です。20年程前から、この会の事務局として関わらせていただきました。そのお蔭で、知り合う機会もなかつた人と知り合いになれたり、在仙会のお蔭だと、最近は感謝するようになって来ました。一時期は本当に大変で、「何で私が？」と思うようなこともありましたが、それをさせていただけののも感謝だと、だんだん年と共に感じています。私も出身は、お二人と一緒に宝江中です。則夫さんとは小学校も同じでした。五十嵐さんとは中学から一緒です。2人は、野球部と剣道部で、それぞれ、いっぱい活躍していました。

今年で、東日本大震災から丸5年が経過しました。その矢先に熊本で大地震が発生しました。どうしても、あの時に戻ってしまいます

(五十嵐) 震災の時、私は東京にいました。建物が古かつたので、崩れるのではないかと心配しました。東京は、比較的復旧は早かつたのですが、新幹線など交通が止まつて、こちらに帰って来れませんでした。仙台空港が水浸しになっているのは、3時半頃には見ていました。「危ない!」、逃げろ、早く早く!」と。でも本人達はわからないんですよ。もう、宮城県全滅だと思ひました。1カ月位して会社の役員会があつて、羽田から山形空港経由で、バスで自宅に帰つたら、カミさんから「何しに来たの?水も電気もないところに!」って。

(菅原) 私はたまたま町内会長をやつていました。マンションなんですが。大規模半壊で、5階から上の人達は、みな出されて市民センターに避難、9時過ぎに行つたら、いっぱいでびっくりしました。1週間位、炊き出しをしました。たまたま、母の一周忌で、前日に出張先の札幌から仙台に戻つたため、空港の車が流されずに済みました。もう一人は車を流されて。最初に見た時は本当に全部がなくなるのかなあと思うくらいでした。こればかりはどうしようもない。

(佐次) 震災の時は帯広にいました。北海道からの災害派遣部隊の移動は、フェリーし

かないので、海上自衛隊の船やアメリカの船だとかに乗つて、何とか来しました。4月1日、仙台に転勤後は、後方支援を担当しました。車の燃料の確保や、救助の為にドロの中に入るの、胴長を全国、外国からも輸入しました。以前から、「地震と津波は絶対来るから準備しておきましょう」と、沿岸の自治体の方と一緒に訓練、準備したことを憶えています。実際に発生して、本当にそうなるてしまった。事前にもっと何かできたか、というと厳しいものがありますが、きつかつたのは、娘さんが行方不明の部下がいて、その現実の中で、救助活動をしているわけです。大きな災害になると、助ける人も同時に被災者で、自分の事をしないで他の人を助ける活動をするわけです。

(佐則) 私は震災の時は、南警察署におりました。荒浜というところが壊滅状態になつて、その対応で、もう「てんやわんや」、15日間は大変な思いでした。無我夢中、仕事では大変な思いでした。最初に現場があるので、救出にも限界があり、だいたい110番があつたのですが、行けませんでした。夜で見えないし。朝になって、消防隊・自衛隊さんが来てくれて、だいたい救出できました。次に、遺体の関係

ができませんでした。遺体は警察で検視しない限り死者にならないんです。最初は署に持って来いということをやっていたら、もうそれどころではなくなつて。若い消防や自衛隊さんは、遺体を見てかなりのショック受けているようで、可哀想でした。

(千葉) 私は震災の日、仕事で、このビルにいました。昭和38年築のビルで怖くて、女の子は泣き出し。あの日、無常の雪というか氷雨が降ったんですね。女の子達を帰らせるにも、結局、雪の中を歩いて帰るのもどうかと。妊娠6カ月の子もいて、旦那さんが心配して迎えに来たけれどスレ違い。そういうこともありました。何とか皆、無事に帰れたようでした。このビルも良く持ったなあーと。ラジオから流れる言葉が信じられなくて。何を言っているのか。信じられない事が、映像を見て、こんな大変な事が起きていたんだと。

いろいろ、それぞれの震災について、お話を頂きました。熊本地震でお亡くなりになられた方も合わせ、ご冥福をお祈りいたします

話は変わりますが、同期の皆さんとお会いする機会は

(佐則) 職域では、プラタナ

ス会で会いますが、同期とは、個別に会うという程度では。

(菅原) 私は特殊かもしれないですが、周りに結構います。仕事の関係で亀井とか。佐藤とか。佐々木とか。丸山とか。不思議に繋がっています。

(五十嵐) 最近になって、少し余裕ができて、そんな機会も。

(佐則) 年齢もいって、それなりの立場になると、こういった繋がりが助かってくるとか。

(五十嵐) 同窓会には、若い人達が来ないですね。裾野、これからの人があまり来ない。職場でも若い人達を集めようと思っています。



菅原誠さん

(菅原)

何か、きっかけでもあれば、出て来るかも。一昨年、野球が頑張ってくれて、あの球場がいっぱいになった。3回戦からずっと応援に行ったら、だんだん外野席へ移された。あれだけ集まったんだから、気運はできた。「夢を見ましたね」。

高校時代の思い出、一昨年の高校野球のようなものは

(佐則) パツとした思い出はない。

(佐次) 私は応援団でいろんなクラブを応援したが、勝ち上がっていった、応援した記憶はない。

「フェンシングは」、「バドミントンは」、「女子柔道部が」と、いろいろ出るが、いずれもパツとしなかったと。ここで、千葉さんが「携帯」。何でも知っている? バレー部OG・清水さん(旧姓寺崎)へ電話取材。「女子バレーは強かった」とのこと。(元応援団の佐藤さんも、そういえば、南の方、白石へ行ったかな)

(五十嵐) 勉強の方もパツとしなかったけど、悪い奴もいないし、捕まる人もいない。(?)

男女併学の最後の学年では

(佐則)



佐藤則夫さん

共学は一学年下から。ベランダから下を見ると、男女が賑やかにしていた。こちらは、男ばかり。

(佐次) 私は、部活が天文班

だったので、女子もいた。土日も集まっていたし、観測は夜だけど、女子も来ていた。

(菅原) 2組には、女子がいたのでは。

(千葉) 私たちの学年から、女子の理系のクラスができたので、男女は別だったはず。

(菅原) いろいろ狭間だったんだよね、制度的にも。別に共学がうらやましい訳でもないけど。

記憶に残る先生は

「相司先生いたな」、「古典のはじめ先生に教わった」、「数学の遊佐先生、生徒に泣かされた話をしていた」、「おばちゃん、美術の小関先生に、自画像を描かされた」、「音楽の亘理先生、若くてきれいだった気が?」... などなど。(アルバム持つて来れば!)

最後に、総会幹事として参加の呼びかけと動員策を

(五十嵐)



五十嵐信さん

前回の私たちの幹事は平成12年9月、16年振り。後はないかもしれない。

(菅原) 広く同期に会える最

後のチャンスだ。

(千葉) 総会幹事に菅原、佐藤と人脈の広い新しい同期も加わった。ますます楽しみです。

(五十嵐) 同期には皆さんで声掛けしながら、知り合いの人を集めてもらう。そして、横の関係だけでなく、先輩とか後輩とか、縦の方も。特に女性の方もだね。

(千葉) 女性は、仙台市外の人にも声を掛ける。それと、来年の総会幹事も連れてこないといけないですね。

(菅原) 去年の総会では、上の人はいたけど下の人はいなかった。あまり記憶がない。(佐則) 何人か必ず呼ばないとダメだね。私は、下は2人までは知っている。それぞれ一人一人確認して、誘って行きましょう。

(編集・広報誌委員会)

お忙しいところありがとうございます。総会へ向けての気運が生まれたのだと思います。同期の皆さんの一人でも多い参加をお願いします。

(追記)

対談後、皆さんは、たまたま佐沼から仙台に出て来ていた同期の方と合流、打ち合わせは、夜遅くまで続いたそうです。

河北新報夕刊企画・「仙台だけどープロ野球編」(平成26年5・6月、12回シリーズ)に、24回生の同期お二人が、そろって登場しました。西條佳行さんは、西武・「岸投手を応援する会」幹事、佐々木信行さんは、元ロッテ二軍監督として。今回は、「楽天」と「高校野球」をテーマに、西條さんが、佐々木さんにお話を聞いた。(5月18日取材)

われら同期 (24回生)

西條佳行さん・佐々木信行さん

スポーツは

「流れ」と「メンタル」

(西條) 先日のロッテ戦もだが、「ツアーアウトを簡単にとつてから、突然ストライクが入らない」、「ワインニングで7点もとられる」、「ノーアウトランナー3塁でも、外野フライ一本も打てない」、プロなのに、「一体何なの?」と思う。どんな状況なの?

(西條) 今年の「楽天」は、どうでしょうか?
(佐々木) 弱いね。始まって2カ月だけど、投手層の薄さを感じる。野球はピッチャーだからね。青山、松井がしっかりしていれば勝てる試合はある。そこをきちんと勝てば、5割位はいける。打撃では、ホームランバッターがいない。外国人は言葉の壁。技術面より、メンタル面で合わない。メンタルのコーチがいるともっと違うと思う。

(佐々木) 一番大切なのは「流れ」と「メンタル」。解説でもよく話すが、「流れ」が一番大事、不思議だ。5回のグランド整備で間があいて、「流れ」が変わったり、逆に変えたり。また、「ボーンヘッド」や「イージーミス」でも。勝負事は「流れ」が大事。その「流れ」を変えたり、作れるのがいい選手。そして、試合でのその「流れ」を掴むのが監督の仕事。メンタルの強い選手は、ランナーを出しても切り替える。打たれても抑えてゲームを作り、ペース配分しながら全体を構成できる。

(西條) 田中は、ピンチになると、顔が変わったね。
(佐々木) もっている球種が使える。ギアがいつもトツプに入っている選手は、それ以上はできない。楽天には、今それができる選手が少ない。
(西條) 5回位までいいピッチングをしているのに突然崩れたり。

(佐々木) 力のない選手は踏ん張れない。いいピッチングでもめいっばい。精神的に余裕ある選手はプレーにも余裕がある。普段の厳しい練習の結果が自信になる。

(西條) 楽天は、これからどうですか?

(佐々木) 一時は、良かった。バッターも打てたし、松井も抑えていた。今は、釜田や美馬あたりは疲れている。青山、福山もバタバタの状態。皆まだ若くて経験不足もある。プラス思考になって開き直りも必要だ。青山は神経質なピッチングをしています。自分を追い込んでしまう。技術におぼれて理想を描いてしまう。メンタルを変えたら強くなる。難しいが!

野球(スポーツ)でいいなのは、「流れ」と「メンタルの強さ」だ。

やっぱり「夢」だから 人生わかんない

(西條) ところで、話は昔に戻りますが、「なんでプロに行ったの」

(佐々木) 高校2年生の時、一般企業から、「(野球で)来年、来ないか」と誘いがあり、「あとは名前を書くだけ、ラッキー」と思っていた。そうしたら、ドラフトに上がって、プロ行った。もともと、プロの(厳しい)情報を持っていた

ら行かなかったかも。何も知らなかったし、やっぱり「夢」だから。人生わかんないね。選手としては大成しなかったけど32年もロッテでコツコツ。二軍の監督までできた。そして「運」。楽天が仙台に誕生して、野球解説をさせてもらっている。解説だって、正直もともと実績のある人がやるんだが、俺は地元で収まりがよかったのか。

(西條) これまで記憶に残る試合は?



写真 右 佐々木さん 左 西條さん

(佐々木) 高校3年の東北高校に負けた試合。人生そこで終わってしまった気がした。帽子をとって挨拶して、「えっ!俺、明日から何やるんだろ?」朝から晩まで野球やって、負けるまでは甲子園に出られると思っていたからね。

(西條) 高校野球の魅力は?

(佐々木) 目標をもってそこに向かって努力する事。忍耐力、団結力、いろんなことを学べる。その時は、皆で「夢

に向かって行くんだ」と。夢って大事だ。甲子園は、プロの選手も見て盛り上がる。アメリカの選手は、「WHY?」だが、デートしたいのも我慢して、朝から晩まで野球して、殴られ、蹴つ飛ばされても耐えて、頑張つて、そういう高校生が、あそこで試合しているから応援する。人に感動を与えるのは、厳しさに耐えた人だからできる。それが無いとダメ。(もちろん「体罰」はいけないが!)

(西條) 仕事も同じだね。(事務局) 最後に、お互いエールの交換をお願いします。

(西條) 地元密着で、ブーズー弁をいれてパフォーマンス、高齢者もほっとするような言葉で、わかりやすい解説をお願いします。

(佐々木) 死ぬまで健康維持のための努力をしなきゃ。自分の足で動けるように、自分もするし皆もして欲しい。もう一步、前へ足を出して、しんどくとも頑張ること。人間死ぬまで努力。

西條佳行さん…登米町出身。(株)七十七銀行支店長を歴任、定年後は、関連企業の(株)宮城商事に勤務。

佐々木信行さん…津山町出身。元ロッテ二軍監督。現在はTBC野球解説と「暖風は灸整骨院」(若林区荒町)オーナー。

特別寄稿

「ポリビアでの交流」

高三十六回生 渡辺祥子

(フリーアナウンサー)

今年五月、ご縁があり、南米ポリビアで、現地の日本人の方々に、物語の朗読や東日本大震災後を人々がどう生きたかをお伝えするなど、様々な交流をして参りました。

訪ねたのは、昨年入植六十周年を迎えたサンファン日本人移住地。そこでは多くの日本人が、我々と同じような生活をしていました(もちろん日本語で)。



(憩いの郷)

(二世の方)

が、東北の民話や芥川龍之介の『蜘蛛の糸』などを懐かしそうに聞いてくださいました。その後お茶会をし、入植当時のことを伺うと、「夢と希望を抱いて来たが、周囲は見渡す限りのジャングルで、

あてがわれた家は、ヤシの葉っぱの屋根と竹を半分にして繋ぎ合わせた壁で急ごしらえした共同宿舎。途方にくれたが、とにかくやるしかない!と木を伐り、道をつくり、種を蒔き...ただただ働いた」とのお話し。

困難な状況の中、自らの運命を自らの手で切り拓いた方々。「今が一番幸せ」と微笑む皆さんの表情を見ながら、不幸な状況を幸福へと転換させる、人間の

「生きる力」を強く感じる事が出来ました。そしてその姿に、私は五年前の東日本大震災の被災の地で自らの境遇を切り拓く人々の姿を重ね合わせました。

また、「親たちは大変な状況の中でも子ども達の教育を考え、この地に着いてまもなく大学や女学校を出た人たちが先生になり、また現地の人を雇ってスペイン語を習わせた。そうした場が徐々に学校になっていった」という話もお聞きしました。

今その居住地には、日本語とスペイン語の両方の言語で授業が受けられる小中一貫校「サンファン学園」があり、日本人はもちろん、多くのポリビア人も通っています。

その学園の日本語で学ぶ子ども達にも朗読をし、高学年には、東日本大震災時に人々がどう助け合って生きたかな

ども話しました。そして、「被災の地で生きる方々の姿が、皆さんのおじいさんやおばあさんがジャングルを切り拓いてこの地をつくった場面と重なりました。そんな思いや、生きる力をしっかりと受け継いで欲しい」と話しました。



(子ども達への朗読)

またその学園では、下校前に掃除をするという、日本と同じ教育スタイルをとっています。掃除は精神文化であるとの日本的解

釈は、世界でも珍しいとも珍しいと

聞いたことはありませんが、やはりこちらでも「なぜ子どもに掃除をさせるのか(その仕事の人にはさせるべきだ)」とクレームを入れるポリビア人の親もいるそうです。しかし、学校では「教育の一環」として説得をし、続けているのだそう。遠く地球の反対側に来て、改めて日本の教育や、日本人の精神の素晴らしさを実感し、大切に受け継がなければとの思いを強くしました。

在仙同窓会「ゴルフ愛好会活動報告

春と秋の年2回開催しているゴルフ愛好会のコンペは、毎回先輩や同期、後輩の皆さんが世代を超え、親睦を深める絶好の機会となっています。

第十八回春のコンペは、今年六月十二日松島国際カントリークラブで開催しました。秋開催の第十九回コンペには多くの参加をお待ちしています。

◆千葉氏(三十回生)が優勝
第十八回コンペ H28.6.12

(松島国際CC)参加17名

優勝 千葉 覚(高三十回生)
準優勝 菅原好信(高四十一回生)
第3位 羽生正弘(高十八回生)
ベスグロ 羽生喜幸(高二十回生)



第三十二回在仙同窓会総会開催

第三十二回佐沼高等学校在仙同窓会総会は、平成二十七年九月五日（土）午後四時より青葉区の「パレス宮城野」で会員八十一名が出席のもと開催されました。今回の総会当番幹事は、二十六回生が務めました。

総会では、高橋孝昌会長の挨拶や来賓の小野寺校長から祝辞を頂き、予定された「決算・事業報告」や「平成二十八年度予算案」等の議案が原案通り承認されました。

また、総会では、三十八回生でソフトテニスナショナルチーム男子監督兼東北高校ソフトテニス部監督の中津川澄男氏による記念講演が行われた他、懇親会も大いに盛り上がり、最後は「校歌・応援歌斉唱」「万歳三唱」で総会を締めくくりました。

（当番幹事 高二十六回生 渋谷聖寿）



校歌・応援歌の斉唱！



和やかに懇親会で旧交を温めて

◆トピックス◆

○本部同窓会 高橋勝利会長
春の叙勲「旭日単光章」に輝く

登米中央商工会会長として永年、中小企業振興に尽くされ、平成二十八年春の叙勲の栄に浴されました。

○在仙同窓会 高橋孝昌会長

「宮城県退職公務員連盟会長」にご就任
宮城県退職公務員一万四千名の組織の会長にご就任され、公共への奉仕と社会福祉の増進、会員親睦などの指揮を執られることになりました。

◆総会開催のお知らせ◆

第三十三回佐沼高校在仙同窓会の総会・懇親会は平成二十八年九月三日（土）午後四時からパレス宮城野において開催されます。

※総会開催のご案内をお送りしておりますので返信ハガキを必ず投函してください。返信ハガキの戻りにより、会員皆様の住所等の維持管理が図られます。ご協力をお願いします。

◆編集後記

「ひろがり」第十五号は今年の総会当番幹事二十七回生の座談会を企画して掲載しました。来年度は二十八回生の皆さんに登場していただきたいと考えております。

編集委員長 佐藤新光



ホットハウス

「住み替えて始まる素敵生活」
不動産のことならホットハウスへ！

代表取締役 日下 敦（高第30回生）

仙台市青葉区本町1丁目5-31
Tel 022 (215) 7787

株式会社大成ハウジング

代表取締役 佐々木 良泰
（高第三十一回生）

仙台市若林区六丁目宇左近堀十五
☎022 (287) 3226

「地域の患者さん、
リウマチ患者さんのために」
ゆうファミリークリニック

院長 高橋 裕一
（高第三十回生）
宮城県宮城郡利府町字新館二一五
☎022 (766) 4141

（株）日専連ライフサービス

「ちょっといいがある
あなたに身近な
日専連ゴールドカード」

仙台市青葉区中央一三二
☎022 (267) 9211